

高齢者大学校で「劇を創る」という講座があるのは素晴らしいことですね。自分たちの暮らしを見つめて、それを足場に劇を生み出していく——高齢者が元気で心豊かに生きていくための新しい挑戦だと思います。

その「演劇集団 広小路」の 4 作目の作品は「ホーム・あかつき」です。高齢者のグループホームを劇の「場」として据えて、人間模様と心の再生を描いた作品です。

認知症の症状が出てきた母親を誰が面倒を見るのか…これまで同居してきた長男が他のきょうだいに助けてほしいと声をかけます。しかし、どのきょうだいも事情があると言って、誰も引き受けようとしません。遺産相続には積極的なのに、介護のことになるとみんな逃げ腰なのです。妹がグループホームへの入所を提案し(母は同意していませんが)きょうだいは全員一致で母を入所させます。現実のどこかの家庭でも、起こっていきそうなエピソードです。

このグループホーム「あかつき」には、経験豊かな所長と若い介護士とロボ君(ロボットの介護士)がいて、入所者の介護をしています。ロボ君を登場人物にしたことで、劇がコミカルで楽しいものになりました。「羊羹をヨーカンデ」など、シャレを言うロボットのぎこちなさがそれらしくて客席には笑いが広がりました。

母親(カナ)は家に帰りたいたいと言いつつありますがホームの暮らしの中で少しずつ変化していきます。ホームの日々の活動(折り紙を折ることや歌を歌うこと)を通して、それぞれのお年寄りのこれまでの歴史が語られていきます。折鶴にまつわる悲しい思い出、「かかし」よいう歌にまつわる辛い思い、婚約者の将校が戦死した後の苦勞…どれもこれも戦争への許せない記憶ばかりです。

ただ、劇の流れから考えると、カナさんの歴史を劇の中で描いて、彼女が変化していくことと重ねてもよかったのではないかと思いました。最初、カナさんは主人公的な位置付けに見えましたが、途中から背景になってしまっているようで残念でした。

劇の中で、もう一つ描かれていた若い介護士の悩みは、現実の介護職員の悩みとも重なるものだと思います。彼女が仕事の意味を見出し再生していく過程は意味としては分かるのですが、今の表現では説得力が乏しく、友人からのラインの情報で知った「平和行進」につなげるのは少し唐突だと思いました。でも、入所者と介護職員と一緒に平和行進に向かって「散歩」しようというところに、「広小路」の皆さんの大きな願いを感じました。

オープニングとエンディングに演奏されたトランペットが、若い奏者の姿も含めて印象的で、次の世代につながっている希望を感じました。

また、舞台の真ん中で、劇に寄り添って流れるピアノの生演奏がとても良かったです。

そして、皆さんのウソのない素朴な演技に好感を持ちました。

これからも、暮らしの中から生まれる作品を創り続けてください。楽しみにしています。